

蟲籠

行せられけり、ゆふべにをよんで、むしをとりて、籠に入れて、内裏へかへりまいり、萩女郎花などをぞ、籠にはかざりたりけり、中宮藤原の御方へまいらせてのち、殿上にて盃酌朗詠など有けり、歌は宮の御方にては講せられける、簾中よりもいだされたりける、やさしかりける事なり、

〔倭訓栞中編二十六〕むしや。虫屋の義、續千載集に見ゆ、虫籠に同じ、

〔雍州府志土産七〕鈴蟲籠。下賀茂社司婦人造養松虫鈴虫之籠、其式纖細、刳竹爲籠、内安一小筒、盛土敷苔、種露草少許、倭俗所謂露草、則鴨跖草也、而以紫白絲作藤花形、自籠上垂下、其體堪供觀、到秋入蟲揭檐下、或掛簾眉、晝見之、悅目、夜聽之、娛耳、

〔續千載和歌集秋四〕夕暮がたに、ちいさきこにすゝむしを入れて、紫のうすやうにつゝみて、萩の花にさして、さるべき所の名のりをせさせて、齋院にさしをかすとて、そのつゝみ紙に書付たりける、
よみ人しらす

しめのうちの花の匂ひを鈴虫のをとにのみやは聞ふるすべき

〔續千載和歌集神祇九〕虫屋をつくりて、前大納言資季のもとへ送りつかはすとて、

從三位氏久

君のみや千とせもあかず聞ふりむ我神山の松虫のこゑ

〔嬉遊笑覽禽十〕むし籠を虫屋ともいふにや、續千載集從三位氏久、虫屋を作り、資季卿に贈りし

歌中略。また麥わらの籠は、花鏡紡績娘條に、以小楷籠盛之、挂於簷下云云、以瓜穰飼之などみゆ、

楷はむぎわらなり、

〔源氏物語野分二十八〕わらははべおろさせ給て、むしのこどもに、露かはせ給なりけり、しをんなでしこのこきうすき、あこめどもに、をみなべしのかざみなどやうの、ときにあひたるさまにて、四五人ばかりつれて、こゝかしこのくさむらによりて、いろくのこどもをもてさまよひ、なでしこな